



## 「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861洋光台  
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / 世話人代表 金子 敬  
事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会 TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 巻頭言

### 濱野道雄

はまのみちお

日本バプテスト連盟  
宣教研究所所長

「イエス・キリストに出会った私たちの心には、今は真っ暗闇のような状況であろうと、心が憎しみや悲しみで埋もれてしまっているような状況であったとしても、すでにそこに希望の種子が蒔かれていることを私は信じたいと思います。」佐々木さんが日本バプテスト連盟定期総会の礼拝メッセージで語られた言葉です。

2000年前、真っ暗闇のベツレヘムに、ヘロデにより子どもたちが「一人残らず殺された」ベツレヘムに、家族を殺され嘆き悲しみ疲れきってもはや「慰めてもらおうともしない」人々のうずくまるベツレヘムに、イエス様はお生まれになりました。人々の心が憎しみや悲しみで埋もれてしまっているベツレヘムで、最初のクリスマスの出来事は起こりました。幼子のイエス様ご自身、命を狙われ、なすすべの無い命として、人々の悲しみ憎しみの只中にお生まれになりました。そして、その小さなイエス様こそが希望の種子でした。真っ暗闇を引き裂いて輝く凄まじいまでの神の光は、馬小屋の中の小さなイエス様の光として私たちのところに現れた。それが最初のクリスマスでした。救いがベツレヘムにやってきた。

ルワンダで、佐々木さんはこのクリスマスの出来事に今又立ち会われているのでしょうか。「外国人」としての立場を活かしながら、希望の種子を見つけ出し育てていく、それは東方からやってきた博士のような働きなのかもしれません。

そして日本にいる私たちも、幼きキリストに出会うよう招かれています。佐々木さんは一時帰国をしたときに「なぜクリスチャンが人口の大多数をしめるルワンダで虐殺が起こったのか」という質問を受け、ある種の戸惑いを感じられたと伺います。日本のクリスチャンも、戦時中アジアでの大量虐殺に加担したのです。そして今又、憲法が改悪されようとし、同じ道をこの国はたどり始めているのです。ルワンダの虐殺を人事のように語ることは出来ません。ルワンダの痛みは、私たちの痛みなのでしょう。ならば、佐々木さんが知らせてくれるルワンダの希望は、私たちの希望なのです。

「佐々木さんを支える会」の皆様、クリスマスおめでとうございます。やがて来る新しい年もまた、あの小さな光に、真の希望の光に導かれ、共に生きていきましょう。

## 佐々木和之

ささきかずゆき

## 苦しみや悲しみの連帯

カリサさんから問われました。“日本人がこの被爆の出来事を、広島と長崎の人々だけに負わせているのはなぜなのか？”と。

ノヘリ・ンズィザ！（クリスマスおめでとうございます！）

もうすぐルワンダで2回目のクリスマスを家族一緒に迎えます。皆様はどのようなクリスマスをお過ごしでしょうか？

実は今、この原稿を日本で書いています。REACHの総主事フィルバート・カリサさんと共に11月11日に帰国し、今日まで日本各地（関東、東海、広島、福岡、鹿児島、札幌）の教会や学校等で活動報告をさせて頂きました。カリサさんは一足先に12月1日にルワンダに帰られました。私は昨日12月10日で活動報告を終え、今晚ルワンダに向けて出発します。私と家族、そしてREACHの働きのために、皆様が日々祈り支えて下さっておられることをあらためて知ることができ、感謝の気持ちに満たされた一ヶ月になりました。また、この間頂きました励ましの言葉を感謝いたします。

帰国してから最初の3週間は、カリサさんと二人三脚で講演や活動報告にあたりました。カリサさんは、日本はおろかアジアを訪れるのも初めてということで、滞在中にカルチャーショックを受けたようでした。例えばこんなことがありました。帰国した日の翌日、横浜の洋光台教会で報告会を持った時のことです。同じ横浜在住ということで、私の両親が報告会に来てくれました。私は、前日既に電話で話していたこともあるのですが、父と二言三言言葉を交わしただけで、その後すぐに報告会の準備に取りかかりました。後で話してくれたのですが、カリサさんは、このあまりにそっけない親子の再会シーンに衝撃を受けたということ

でした。私はごく普通に振る舞っていただけなのですが、カリサさんには関係が冷め切った親子としか見えなかったようです。「親子が久しぶりに再会したのであれば、抱き合って喜ぶはずだろう。ルワンダではあのようなことは考えられない！」と言っていた彼でしたが、日本に数日滞在する間に、日本人があまり感情を身体で表現することのない人々であることを理解したようでした。また、滞在先のホテルのサウナ付き大浴場や電車の中などで、ほとんどの人が無言でいることに驚いていました。彼によると、ルワンダにあるサウナでは、入浴客がジョークを言い合って楽しむのが普通なのだそうです。サウナでジョークを言うエネルギーも凄いのと思うのですが、カリサさんには、うつむき加減に膝に両手をつけて、無言でじっと耐えている日本人入浴客の姿はさぞ異様に見えたことでしょう。

### ■REACH総主事カリサさんと広島を訪問

カリサさんの滞在中、私にとって最も印象深かったのは、広島教会での報告会の前日、原爆資料館を訪ねた時のこと



でした。私とカリサさんは、バプテスト連盟広島基督教教会の高橋秀二郎先生のお計らいで、細川さんという被爆者の方と広島平和研究所の永井均先生に原爆資料館をご案内頂きました。私にとっては4回目の資料館訪問でしたが、被爆者の方に直接お話を聞くのは初めてで、とても貴重な時間になりました。細川さんも、「ルワンダからの大切なお客さんですから」と言って、とても丁寧に案内を下さただけでなく、原爆によって亡くなられたたった一人の妹さんの思い出など、ご自身のお気持ちに関わることを私たちに率直に語って下さいました。

この広島訪問は、カリサさんにとっても今回の日本滞在で最も印象深いものになったとのことでした。あの未曾有のジェノサイドを経験したルワンダのカリサさんと、原爆という最も恐るべき大量破壊兵器がもたらした地獄を生き残られた細川さんの間には、私には計り知れない共感が生まれていたようでした。「原爆投下の記念日には、日本中で追悼集会が開かれるのでしょうか」と尋ねたカリサさんは、そのような式典が広島と長崎でしか行われていないことを知らされ、とても驚いていました。そして、「日本人がこの被爆の出来事を、広島と長崎の人々だけに負わせているのはなぜなのか？」という、非常に鋭い問いを發していました。約10年間ルワンダで癒しと和解のために働き、苦しみと悲しみの中にある人々との連帯の大切さを知り抜いているカリサさんならではの問いかけであると感じました。

#### ■ 囚人を対象としたセミナーを実施！

日本に帰国する前の、10月30日から11月1日の三日間、REACHとしては初めてジェノサイドの加害者である囚人を対象にセミナーを実施しました。ルワンダには、一番多い時で約12万人がジェノサイドに関与した容疑者として、裁判を受けることができないまま刑務所に収監されてい

ました。しかし、そのうちの少なくとも約3万人は、数年前の大統領令によって釈放されました。高齢や病弱などを理由に釈放された人々もいますが、その多くは、刑務所内で自白と謝罪をしたために仮釈放処分になった人々です。自白と謝罪をした囚人たちの多くは、現在全国各地で進められているガチャチャ法廷で自白の内容に誤りがないことが認定されると、減刑処分を受けるだけでなく、残されている刑期があれば、服役の代わりに労働奉仕に従事することになります。

REACHは、労働奉仕の刑に服することになった囚人たちの中で、「犠牲者の家族のために出来る限りの償いがしたい」（もちろん、奪ってしまった命は償うことができないものですが）という意欲を持った人々が参加する「償いのプロジェクト」を計画しています。例えば、それらの囚人たちが、ジェノサイドの生存者たちでまだ家を持つことができずにいる人々のために、協力して日干しレンガ造りの家を造っていくといったプロジェクトですが（このプロジェクトの目的や内容については、次号でお伝えする予定です）、今回のセミナーは、それに向けての第一歩として企画・実施されたのでした。

セミナーは、リーチの活動拠点の一つで、タンザニアとの国境近くにある東部州キレヘ県のニヤカランビという小さな町にあるプロテスタントの教会堂をお借りして実施しました。セミナーの主な参加者は、キレヘ県内でREACHが既に協力関



係を持っている教会やイスラム寺院の活動に参加している囚人たち32名（男性31名、女性1名）でした。これらの参加者たちの大多数は、まだ刑期は確定していないものの、刑務所内で自白・謝罪をしたために仮釈放になり、ガチャチャ法廷による審理を待っている人々です。彼・彼女らと既に関係を構築している地元の宗教指導者20名にも一緒に参加していただきました。

セミナーの目的は、1) 釈放された囚人たちが置かれている現状を理解する、2) REACHの活動目的や方針について理解してもらう、3) 釈放された囚人たちと宗教指導者たちの間の関係強化を図る、4) REACH、釈放された囚人たち、宗教指導者たちの三者が、地域社会の和解のためにどのように協力していくことができるのかを話し合う、の四つでした。

セミナーの第一日目には、まずセミナーの趣旨やREACHの目的について時間をかけて説明した後、参加者一人一人が、自分の人生を振り返る時間を持ちました。

「これまで最も嬉しかったことは何ですか？」と「これまで最も辛かったことは何ですか？」という二つの質問の答えを考えてもらい、ノートに書き留めてもらう時間をもったのです。約40分してから、52名の参加者たちを8つのグループに分け、一人一人が思い起こしたことを分かち合う時間を持ちました。参加者の多くは自分の人生について淡々と語っていましたが、中には涙ながらに辛い思い出を語る参加者もいました。

セミナーの第二日目、前日にグループ内で語られたことの一部を参加者全体で分かち合った後、既にREACHの活動に参加してきた女性たちをお招きして、彼女たちのこれまでの体験や今の思いについて語っていただく時を持ちました。その中の一人、アグネスさんは、ジェノサイドの生存者としての当時の体験とその後の歩みを話して下さった後で、参加者たちに対してこう呼びかけられました。

「皆さんがまだ被害者の所に行って直接謝罪していないのであれば、どうぞその人々を訪ねて下さい。勇気を出して罪を認め、真実を語り、赦しを受けるために一歩踏み出して下さい。私はこれまで7人の人々を赦しました！」

アグネスさんの呼びかけに答え、その日のプログラム終了後、三人の参加者がジェノサイドの生存者である家族を訪ね、「自分たちの罪を赦して下さい」と謝罪する出来事が起こりました。彼らは、アグネスさんから赦しの言葉を受けたことによって、一歩踏み出す勇気を得たのでした。

セミナー二日目の後半は、参加者たちが釈放後に帰ってきた地域社会でどういう問題に直面しているのかについて、率直に語りあう時間を持ちました。

「刑務所から故郷の村に帰ってきたら、妻が他の男と暮らし始めていたため、自分は弟の家に居候している」「仕事が見つからずに着るものにも不自由している」「刑務所の中で自白したけれど、被害者に直面して謝罪するのが怖い」など、長い間収監された後に釈放された人々が抱える様々な悩みが語られました。その後、それら元囚人が直面している問題を、地元の教会やイスラム教のコミュニティーがどのように受け止めているのか、また、今後どのようにそれに対処していくことができるのかを話し合うことができました。

セミナーの最終日には、今後、REACH、釈放された囚人たち、宗教指導者たちの



三者がどのように関係を深めていくことができるのかについて話し合うと共に、セミナー全体の総括を行いました。最後は、セミナー期間中を通して語り合い聴き合う関係をつくってきた小グループごとに、セミナーで学んだことや感じたことを様々なパフォーマンス（賛美、詩の朗読、寸劇など）を通して発表してもらい、今回出会えたことや、またこのセミナーを共に成し遂げたことをお祝いしました。同じ参加者を対象にした次回のセミナーは、来年1月に実施したいと思っています。このような関係作りを重ねながら、「償いのプロジェクト」の立ち上げに向かっていきます。

#### ■終わりに

この一年間皆様から頂いてきたお祈り、ご支援、お励ましを感謝いたします。来年は少しずつ現地での活動が本格的になっていくことと思います。どうかこれからも変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。それではこれから空港に出發します。恵みに満ちあふれたクリスマス、そして良いお年をお迎え下さい！

12月11日記



## もうすぐ一年

佐々木 恵

ささき めぐみ

「友だちを与えてください。」  
この祈りと願いがどんどん聞かれています。

### ■「反フランス運動」

ルワンダは今、少々緊張ムードの中にあります。フランスの司法当局が、1994年のジェノサイドの引き金になったと言われることもある「ハビィアリマナ大統領搭乗機撃墜事件」の主犯者として、ポール・カガメ現ルワンダ大統領を始めとする10人の政府高官に逮捕状を出したからです。そのことで、ルワンダでは反フランス感情が高まっているのです。フランス大使館、またフランスのいろんな機関で働く人には国外退去が命じられ、フランスのラジオ放送も禁止されています。首都キガリにあるフランス系の学校も閉鎖されてしまいました。

大統領のポール・カガメは、フランスに対し抗議の姿勢を明らかに示し、この発表のあった翌日には、アマホロスタジアムで、大規模な抗議集会が開かれました。ジェノサイドからルワンダを救ったのはカガメらRPF（ルワンダ愛国戦線）であり、フランスは当時の政権を支援し、ジェノサイドにも関与したというのがルワンダ政府の言い分です。テレビでは、連日ジェノサイド当時の生々しい映像を流していますし、いかに国際社会がルワンダを見捨てたかと言う視点に立ったBBCの古いドキュメンタリー番組を流しています。また、ニュースでは、連日フランスに対する抗議集会やデモの様子を伝えています。国外では現政権側の責任を問う声も上がっているようですが、国内のメディアではそのような発言は全く見られません。この問題を発端に、ルワンダ国民の間で緊張が高まっていく可能性が

ありますので、どうか覚えてお祈り下さい。私たちの日常生活は、普段どおり営むことができますので、その点についてはご安心下さい。

### ■「新しい学校」

3人の子ども達は、グリーンヒルズアカデミーでの一年の学びが終わり、解放された気分です。1月からは、キリスト教系のNGO関係者や宣教師の方々の尽力により今年9月に新設された、キガリ・インターナショナル・コミュニティー・スクールに転校します。「これ以上グリーンヒルズを続けると、私はもうだめになるよ！」とは、長女の萌の言葉。イギリスの学校の自由な雰囲気とはまるで違うこの学校の厳しい教育方針に、この一年よく頑張ったと思います。新しい学校には、プールでいつも遊んでいる仲間が大勢通っています。きっと、子供達にとっては、ルワンダの生活がより生き生きとした明るなものになることなのでしょう！今一つの問題は、その学校には、共喜の学年に空きがないことです。1月8日の2学期始業までに彼も在籍できるようにと祈っているところです。

### ■「ルワンダに来てもうすぐ一年」

この前の日曜日（12月3日）、教会から帰ってきてクリスマスツリーの飾り付けをしました。私たちは、ルワンダで二度目のクリスマスを迎えようとしています。そして12月21日には、私と子ども達がルワンダに来て、丸一年という記念日

を迎えます。この一年、本当にたくさんの恵みを頂いて来ました。特に、日本国際飢餓対策機構のスタッフの竹内緑さんを、主がこの地に送って下さったことは本当に大きな喜びです。彼女は、和之が日本国際飢餓対策機構の東京事務所で働いていた15年前からの親しい友人です。今、和之は日本に活動の報告のために帰国中なのですが、その間、彼女に家に泊まってもらい、主にある豊かな交わりを頂いています。こうして、ここルワンダで折り合えるクリスチャンの友人を得られたことは、何にもまして大きな感謝です。

さて、この一年は、本当にあっという間だった気がします。はじめは、乗り合いバスに乗るのも、地元のマーケットに行くのも、勇気を奮い起こして出かけたものでしたが、今では、乗り合いバスは私たちの足に、また、マーケットではしっかり値切れるようになりました。ルワンダ語は、うちで働いている二人の男性と片言で会話ができるようになり、学びにも力が入ってきています。

友人のデニスさんが貧しい家庭の子供たちのために創設したピース・インターナショナルスクールという学校で始めた「折り紙教室」は、私たち家族にもまた学校の子ども達にもすっかり定着し、二週間に一度の訪問を楽しみにしています。特に次男の共喜はこのことにとっても積極的に、色々とアイデアを出してくれます。



中央・デニスさんと恵

「今度は、クリスマスカードを作ろう！」と次回のために今、アイデアを練っているところです。ところで、創設者であり現在の経営者であるデニスさんは、学校の運営費および先生方の給料捻出のため、11月20日からカナダに出稼ぎに出かけておられます。どうぞ、デニスさんの為に、留守を守るご家族のためにお祈り下さい。



ルワンダ人の友人が与えられることは、私の祈りの課題、大きな願いでしたが、そのことも今、とても感謝しています。ルワンダ語の先生ダミエン、NGO活動を主催しているマリゴレッティ、そして、和之と一緒に日本を訪れたREACH代表のフィルバート。もちろん、ピース・インターナショナルスクールのデニスさんと奥様。一人ひとりの出会いに支えられ、励まされ、ここで生活できる喜びを味わっています。

本当に皆様には、お祈りと金銭面でのご支援を心から感謝します。多くの方々に祈られ、支えられて、ここルワンダで過ごせた一年をありがとうございます！

**Merry Christmas!**  
**and A Happy New Year!**

12月6日記

**世話人会からのご報告**

佐々木和之さんは、ルワンダの中で「和解と癒やしのプロジェクト」を展開するキリスト教NGO・REACHのメンバーとして働いておられます。REACHは、これまでの様々なプログラムに加えて、新たに「償いのプロジェクト」を展開していくことになりました。これは、虐殺にかかわりながら、それを認め謝罪し、残りの刑期を労働奉仕をしながら過ごしていく囚人たちを対象に組まれていくプログラムです。囚人たちによるセミナーの実施や、虐殺事件の際に破壊した家屋その他の再建に従事するプログラムなどが用意されます。この「償いのプロジェクト」には、立案段階から佐々木さんが指導的に関わってこられ、今後も佐々木さんのリーダーシップのもとで展開されていきます。

この度、佐々木さんより「支援する会」に対し、このプロジェクトのための資金援助申請がなされました。私たち世話人は、去る11月28日、佐々木さん本人を交え協議した結果、“ルワンダの平和と和解のために働こうとする佐々木和之さんを支える「支援する会」”の趣旨に合致するものと考え、「償いのプロジェクト」の費用(約300万円・2007年度より順次執行)を支出することといたしました。

これまで、主に、佐々木さんご一家の生活費(福利厚生、教育費を含む)の支援を担ってきましたが、加えて、佐々木さんが主導的に行うプロジェクト費をも支援させていただくこととなりました。ここに謹んでご報告申し上げます。みなさまのご理解を賜り、益々のご関心とご加禱をお願い申し上げます。

佐々木さんを支援する会 世話人会一同  
(代表 金子 敬)

**新たに支援をくださった方々です。感謝致します。**

(06年9月1日～12月9日)

阿部兼美・恵美子、いのみやこひつじ会、江副史子、圓福 泉、大岩寛子、尾崎郁子、尾作雪子、鹿児島リバイバルチャーチ・川島悦子、桑田道子、小池節子、甲山勝行、小平麻由、酒井敬仁・和代、白石久幸、鈴木要三、高地京子、高屋和子、堤 克生、津留崎聡史、永井 均、日本バプテスト厚木教会、日本バプテスト同盟関東部会・CS生徒大会事務局、丹羽佳也子、平田和美、廣島 尚、福井正躬、福山誠、古池 節子、堀川迪子、本田英一郎、増田 孝、丸田静子、向井浩子・螢治、八重樫節雄・真理子、山田洋子、湯川洋久、米田 博、渡辺久美子

以上(敬称略・あいうおお順)

**郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会**

事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。なお、「郵便自動引き落とし」をご利用いただけます。ご連絡いただければ、所定の申込用紙を送らせていただきます。

洋光台教会・蛭川までご連絡ください。(電話045-774-9861)



